

けにこしは牽牛子なり牽字は韻鏡二十三轉先韻にて舌内聲なり牛は三十七轉尤韻の字にて音ギユウ吳音グウなり然るにゴといふ音に用るは萬葉集に瞿麥を牛麥と書るはウ韻を略きてグと呼なり又普通に鐘樓シユウロウをシユロウと唱ふる例と同じことにてまた其グを通音の音ギユナリ其ギユノ切ゲトナレリ云々又云牛ノ吳音ゴハ富ニホ救ニゴノ音響也といへり

〔拾遺和歌集物名〕あさがほ

よみ人しらす

我やどの花のはにのみぬるてふのいかなるあさかほかよりはくる  
けにこし

わすれにし人のさらにも戀しきかむけにこしとはおもふ物かは

〔拾遺和歌集哀傷〕朝がほの花を人の許につかはすとて

藤原道信朝臣

あさがほを何はかなしとおもひけむ人も花はさこそみるらめ

〔源氏物語四十九寄生〕つねよりもやがてまどろまずあかし給へるあしたに霧のまがきより花の色

色おもしろく見えわたる中にあさがほのはかなげにてまじりたるを猶ことにめとまるこちし給あくるまさきてとかつねなき世にもなすらふるがころぐるしきなめりかしかうしもあけながらいとかりそめにうちふしつあかし給へば此花のひらくる程をもたひとり

のみぞみ給ける人めして北の院にまいらんにことくしからぬ車さし出させよとの給略中

朝がほをひきよせ給ふにつゆいたうこぼる

けさのまの色にやめでんをく露のきえぬにかゝる花とみるくはかななどひとりごちてをりても給へり

〔源氏物語湖月抄四十九寄生〕細細抄は常なき花の色なれや明るまさきてうつろひにけり